



JASCC がん支持医療ガイドシリーズ がん薬物療法に伴う皮膚障害アトラス & マネジメント

■一般社団法人 日本がんサポーターズケア学会・編

評者 林 伸和
虎の門病院皮膚科

2018年10月に、従来のがん治療を大きく変えるPD-1を発見した京都大学の本庶 佑名誉教授のノーベル生理学・医学賞受賞が発表された。その直前に発行された「がん薬物療法に伴う皮膚障害アトラス & マネジメント」は非常にタイムリーな1冊といえよう。この本のタイトルは、内容をそのまま表している。手にとるとわかるが、アトラス & マネジメントの名の通り、臨床写真がふんだんに示されていて、説明文には具体的な治療方法が、薬剤とその投与量の時間的な経過を含めて記載されている。痒いところに手が届くマネジメント解説書である。

最近10年ほどの間に抗EGFR抗体、マルチキナーゼ阻害薬、BRAF阻害薬などの分子標的薬や、抗PD-1抗体、抗CTLA-4抗体のような免疫チェックポイント阻害薬が次々と登場し、がん患者の余命は確実に伸びている。

一方で、新しい薬剤は副作用の面でも従来のものとはまったく異なり、高い頻度で薬剤特異的な皮膚障害を伴うことがわかってきた。皮膚障害の重症度はさまざまで、手足症候群や爪囲炎の患者さんが、歩くのもつらいと訴えることは少なくない。そのため、新しいがん薬物療法で効果がみられていても、皮膚障害が原因で休薬したり、投与を中止したりすることもある。皮膚障害を予防したり治療したりすることは、患者がquality of lifeを維持しながら薬物療法を継続するために、非常に重要である。

新しいがん薬物療法による皮膚障害の重症例は、皮膚科医に紹介される。また、予防法や軽

症の症例への対処は、腫瘍を扱う全科の医師に求められる。このため、腫瘍を専門としない皮膚科医や、腫瘍を扱う他科の医師も、皮膚障害とその治療法に関する十分な知識が要求される。

現時点では、がん薬物療法による皮膚障害への対処法のエビデンスレベルは高いとはいえない。それだけに、エキスパートである日本がんサポーターズケア学会の皮膚障害部会のメンバーによるコンセンサスからなる本書は価値が高い。本書に具体的に示された臨床像と治療法を参考にすれば、適切なステロイドの強さや抗菌薬の内服量の設定など、適切な治療法を決めることは容易である。本書は、がん薬物療法による皮膚障害に対して、積極的なマネジメントを行う勇気を与えてくれる1冊である。



B5判・160頁

定価 3,780 円 (本体 3,500 円)

金原出版・2018年8月31日発行